



ガーデナーの妻
山中眞知子



「家庭内捨て子物語」

著者 入江健二

第一部 青空

イースト・ロスアンゼルスへ

一九七一年。二郎は三〇才になっていた。築地のがんセンターへ友人を訪ねていった時、友人の妹古田幸子に会った。その後、彼女からがん研究の手ほどきを受けながら、結婚する事になったのである。子どももすぐ生まれ太郎と名づける。

「アメリカかどっかへ留学しようよ」二郎は幸子の辛さを知らなかった。

「理学部出身で女のアタシが医学の分野でどんなに差別されているか知らないのよ」

「そうか、行くならアメリカだね」英語は二郎の得意だった。医学雑誌で、人間のガンの免疫性を追求しているロナルド・モーガンを見つけた。

二郎は祖母が子宮ガンで

亡くなった事も含め、妻のマウス乳ガンの研究についても書き添えた。

早い返事がきた。

「自分はまもなく西海岸のUCLAへ移る。二人に来てもらいたい」恐ろしいほど安い給料だった。覚悟の上である。

勤め先は、UCLAメデイカルセンター外科がん研究部、モーガンの研究員だ。

二郎が渡米して、丸一年が経った頃、ミスター・タナカという人物からの電話を研究室で受けとった。日本での事二郎は東京の鬼久保病院で、F女史の虫垂炎の手術を執刀していた。F女史は「ベトナムに平和を

市民連合」平和運動のグループに属していた。ミスタータナカはF女史の話をした。われわれのグループでスピーチを頼んできたのだった。

二郎は家族をウエスト・ロスアンゼルスのアパートに残し、中古のフォードで出発した。リトル東京のコーヒートリップで会った。

タナカの本名はシンゴ・オノ「なんかボクのおヤジに似ている。北九州男子の顔だ」ソト・ストリートを通過すると、シンゴ君の生活共同体があった。運動仲間一〇人ほどが住んでいる。広いリビングルームに二〇人ほどの若い男女が待っていた。

「ぼくの兄も弟も確かり者でした。ぼくは難産で、体もまともではなく、ぼんやりグズでした。父はぼくを嫌い（一人多すぎた）と母に言ったそうです。」

二郎はひと息ついて、東向きの窓から、午後三時の青空を眺めていた。

シンゴ君から野呂瀬義男さんを紹介された。野呂瀬義男さんとマンザナー巡礼に行った。仲地信政氏はJAWAの会長だと紹介された。日系人社会のことが少しずつ分ってきた。JAWAの中に「健康相談室」を作り、相談相手になって欲しいと頼まれる。

二郎はJAWA（日系福祉受給者の会）で月に一度

「健康相談室」を開く事になった。日系一世や婦米二世の苦労話などききながら健康相談に応じるようになっていた。

一九七六年、基礎、臨床合わせて一〇科目、二郎は合格した。二郎は「ポケベル付きのドレイ」というアダ名をつけていた。四〇歳近い二郎は、そんな生活を四年間続け「やっとあと一年」となった一九八〇年の六月に事件がおきました。読んでいても、二郎と一つになって苦しくなります。

UCLAの仕事は駄目になるかも知れない。妻の幸子はUCLAの中でも生物學として免疫を研究する部門へ移ることになった。理学部出身の彼女には、そういう道を選ぶだけの興味と力が備わっていた。

二郎はマウント・サイナイ病院の外科臨床研修の生活は事件のために駄目になるかも知れない。辞めさせられる前に、辞めてやろう。

「よし、一世や婦米の人たちのために開業しよう」と思ったとたん、フリーウェイを走る足に、しつかりと地面を踏みしめる感覚が生じた。「そうか。ここが僕のふるさとなんだ。」

ロスアンゼルス・リトル東京の三番街。ジャカラランダの木は、二

郎の目には、紫のトンネルの先に緑のトンネルが見えます。

「あ、あのトンネルはここに続いていたのか」

小学校六年の五月、二郎がはじめて医者になることを夢見た。あの若葉のトンネルです。

二郎は今、平凡な開業医です。

「でも、ここにはボクを必要としてくれる人たちがいる」

そうです。二郎の患者でなくても、二郎を頼りにしている人もいます。

今日はウォーカーにもたれて家の中を歩いても、五六歩がやっとである。私は入江ダクターより「処方薬に頼らぬ健康維持」と題した本をいただいた。JWR O日系福祉権擁護会。健康相談室からの書物。私の座右の書だ。

彼は、社会運動までなさるから、ダクターの健康が心配です。

「朝はコーヒートリップで、走り書きですよ。やっ」と一冊の本になりました。」

